

被災地高校での心理支援 その3

～とても長かった一年、過去・現在・未来～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

1 長かったこの一年

東日本大震災から一年が過ぎました。3月11日午後2時46分～、長い揺れが収まらず、耐震構造のない中学校でケースカンファレンス中だった私は、机の下にもぐりながら、ひたすら校舎が崩れないことを祈っておりました…。あの日から一年、これほど長かった一年は今までもなかったでしょう。

週末毎に宮城県気仙沼から自宅へ戻り、大学の授業を終えてからまた現地へ赴き、週4日の支援を続けていた5月から7月までの日々。高校から車で40分のところに用意された宿舎、それは、岩手県一関市の千厩町の一角にあり、近くに豊臣秀吉に抗った金山一揆で有名な松澤神社の境内が広がっていました。この宿舎には、鹿児島県、三重県、広島県から思いを持って赴任してきた有意な仲間が、同じ屋根の下で暮らしていました。週1、2回、近くのレストランに必ず集まって、励まし合いながら夕食を共にした日々も、はるか遠いことのような気がしてきます。

2 被災地の今

被災地は今、緊張しきったピリピリした空気は去り、学校も街も一見落ち着いています。しかし、海沿いへ向かうと、突然吹き曝しの風景が、壊れた道路や港湾設備と共に、むき出しのまま目に飛び込んできます。

また、一見元気そうな子どもでも、心に深い傷を負い、その傷もまだ癒えていない、というケースも残っている心配があります。さらに学校の日常性を支え、子どもたちの安心感を醸成してくれた先生方も、多くが被災者です。先生方の心のケアも、今後も必要になっていくでしょう。神戸震災の場合、心理支援の数がはっきりと減り始めたのは、5年目になってからと言います。

津波で校舎が使えなくなった高校は、昨年11月、ようやく仮校舎ができました。自前の保健室もできて、生徒も先生方も少しずつ活気が感じられています。年が明けたある日、被災された先生からいただいた便りには、次のような文面が記されてありました。

「…仮校舎に移り、生徒職員ともに本拠地となる居場所ができたことは、大きな安定感を感じます。また、先の話に

なりますが、本校舎建築が決まったことは、関係職員のみならず、OBや地域の方々の活力になります。疲れきっている職員たちではありますが、頑張らねば…という思いになりますね。（中略）来年度の準備が少しずつ入ってきて、いつものように行事が組めることに、有難い気持ちでいっぱいです。いろんなことがあった一年でしたが、たくさんの方々に支えられて生きのびました。…」

この頃は週1回、日帰りか1泊2日の支援を続けていました。大宮で朝6時半の新幹線に乗り換え、一関駅からはタクシーに乗って片道3時間半はかかります。「毎週新幹線に乗って行ってるんだよ」と言うと、小学生たちは「いいな、ほくも行きたいな」と歓声をあげますが、高校生たちに話すと、「それは、たいへんですね」と全く違ったシリアスな反応が、返ってきたものでした。

暑かった夏が去り、紅葉が秋風に揺られて落ち、車窓から望む緑濃い山々が、やがて雪で白く覆われていくのを見ながら、被災地の子どもたちに会いに行く日々が続きました。そうして、3月11日、あの日からの一年後がやってきたのです。3月は統計上自殺者が最も多く、アニバーサリーショックに陥らないだろうかと案じる中、幸い破綻なく乗り越えることができました。

3 今後に向けて

漁業の街気仙沼、その水産加工会社のほとんどが流されました。保護者の多くの方々が勤務先を奪われ、失業給付も途切れ、見通しが立たない生活の中で、苦悩がにじり寄っています。それに加え、狭く気づまりな仮設住宅や親類宅の生活が続く家庭では、心身の疲弊も極限に来ています。

「本当の愛は、見つめ合うことではなく、同一方向を互いに見つめ合うことである」と記したのは、サン・テグジュペリでした。子どもたち、先生方、保護者の方々と、気仙沼が以前の活気ある街に復興し、新たな繁栄を遂げていく姿を見つめ合うことができるようになっていければ、私の肩の荷も軽くなっていくでしょう。来年度以降は、スーパーバイザーの立場も兼ねながら、体力が許す限り被災地支援を続けていこうと考えています。